

スポーツに対する原因帰属に関する研究

伊藤 豊彦*・島田 正大**

Toyohiko ITO and Seidai SHIMADA
A Study on Causal Attribution for Sports

I 目 的

達成行動の原因帰属理論は、成功・失敗がどのような原因によって規定されたかという原因認知が、その後の達成行動を認知的に媒介するとしている⁷⁾¹⁰⁾。この成功・失敗を説明する主要な原因として、一般に能力 (Ability)、努力 (Effort)、課題の困難度 (Task Difficulty)、運 (Luck) の4要因が用いられる。さらにこれらの帰属要因は、統制の位置 (Locus of control: 内的-外的) と安定性 (Stability: 安定-不安定) との2次元上に分類され、統制の位置次元が感情反応に、安定性次元が期待の変化に影響するとされる (表1を参照)。

表1 成功失敗の認知的決定要因

安 定 性	統 制 の 位 置	
	内 的	外 的
安 定	能 力	課題の困難度
不 安 定	努 力	運

たとえば、努力に帰属される成功は、課題のやさしさに帰属される成功よりも成功に対する誇りや有能感のような感情反応は高いと考えられる。また、能力不足に帰属される失敗は、不運に帰属される失敗よりも次回の成功への期待を大きく減じさせるであろう。つまり、以上のような認知的プロセスを経て感情反応と期待の変化が、最終的に次回以降の達成行動の強さ、方向、持続性を決定するとされるのである。

運動やスポーツの場面では、その特性としての競争性から必然的に勝敗を繰り返し経験しなければならないために、その原因の認知過程は極めて重要な意味を持つと

いえる。また体育の学習場面では、失敗経験の反復に起因すると考えられる「運動が嫌い」や「体育が嫌い」の問題がしばしば指摘されているように、スポーツにおける原因帰属を検討することは、教師の具体的指導に有益な手がかりを与えらると思われる。

ところで、体育・スポーツ事象を原因帰属の立場から検討した研究は、そのほとんどが運動課題での成功・失敗あるいはスポーツでの勝敗に対する原因帰属のパターンを検討したものであり¹⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁹⁾、体育・スポーツ場面のパフォーマンスが何によって規定されていると認知しているかという一般的な傾向を検討しようとした研究はみあたらない。

また、体育・スポーツ事象を原因帰属の立場から検討する場合、原因帰属と同様に運動パフォーマンスを規定していると考えられる自己評価や態度などとの関係を検討する必要があると考えられる。

そこで本研究では、以下の2点を明らかにする目的で行われた。

1 スポーツに対してどのような原因帰属の様相を示すのか。また、原因帰属の様相は、高校・大学および性によって差異があるのか。

2 原因帰属と自己評価および態度との間にどのような関連があるのか。

II 方 法

1 調査対象

島根大学1、2年男子111名、女子68名および島根県立隠岐高校2年男子29名、女子57名、計265名を調査対象とした。

2 調査期日

調査は、昭和57年5月から6月にかけて実施した。

3 調査内容

まず、運動やスポーツに対する自信の程度を「自か信

* 島根大学教育学部保健体育研究室

**島根県立隠岐高校

ある」(5点)から「自信がない」(1点)までの5段階で尋ね、自己評価得点とした。

次に、運動やスポーツに対する原因帰属について、能力、努力、スポーツ技術のむずかしさ(課題の困難度)、運および教師の5つの要因ごとに、運動やスポーツでの優劣との関連の強さを「非常に関係がある」(5点)から「全然関係がない」(1点)までの5段階で尋ねた。さらに、体育の学習内容として代表的な陸上、球技、器械運動、水泳、格技、ダンスの6つの運動領域に対して、その優劣と5つの帰属要因との関係の強さを同様に求めた。なお、本研究で教師要因を帰属要因として加えたのは、体育やスポーツの学習場面で重要な役割を果たしていると考えたためである。

最後に、体育に対する態度を小林ら⁸⁾が作成した「体育授業に対する態度」質問紙によって測定した。この質問紙は、喜び・評価・価値の下位尺度各10項目、計30項目から成り、それぞれの項目に対して「賛成」(3点)から「反対」(1点)までの3段階で回答を求めるものである。従って、態度得点は30点から90点までの範囲に分布することになり、得点が高いほど体育授業に対して好意的な態度を示している。

III 結果と考察

1 スポーツに対する原因帰属について

まず、運動やスポーツでの優劣に対する原因帰属得点の平均値および標準偏差値を表2に示した。またそれらを図示したものが図1である。

図1からもわかるように、最も重要視されている要因は、努力要因と能力要因であった。次いで教師要因、課題の困難度要因(スポーツ技術のむずかしさ)の順となり、運要因は最も関係が少ないと評定された。この傾向は、高校女子の帰属得点がいずれの要因についてもやや低いもののほぼ一定したものであるといえよう。

一般に、運動やスポーツで良い成績を上げるためには、練習やトレーニングなどの長期にわたって努力を必要とする過程を経なければならない。また一方では、運動能力やセンスなどの運動やスポーツに必要な先天的能力が成績に大きく影響するという事実もある。さらに、体育やスポーツの学習場面では、体育教師やコーチも学習過程において重要な役割を果たしている。従って、努力、能力、教師要因が運動やスポーツにとって比較的重要であると認知されたものと思われる。

原因帰属と学習意欲あるいは動機づけとの関係をみると、自己の成績が努力によって規定されているという認知は、たとえ失敗を経験しても次回はさらに努力すれ

表2 スポーツに対する帰属得点の平均、標準偏差値

		能力	努力	スポーツのむずかしさ	運	教師
高校	男子(N=29)	4.2 0.81	4.4 0.83	3.3 0.89	3.0 1.09	3.7 1.23
	女子(N=57)	3.6 0.98	4.1 0.92	3.2 0.89	2.3 0.85	3.2 0.82
大学	男子(N=111)	4.3 0.68	4.4 0.68	3.3 0.92	3.0 0.92	3.8 0.78
	女子(N=68)	4.4 0.66	4.5 0.61	3.4 0.83	2.9 0.77	4.0 0.75

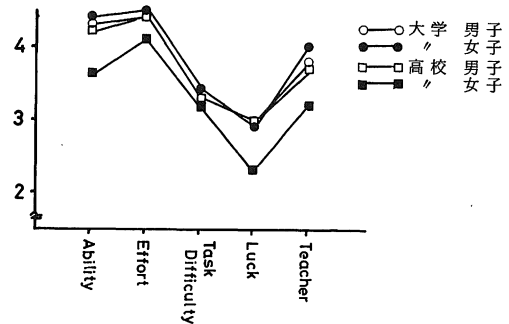


図1 スポーツに対する帰属得点

ば成功できると考えるために最も望ましいとされている²⁾。それに対して、本研究で示されたようなスポーツでの優劣が能力要因に強く規定されているという認知は、失敗を経験した場合、能力の低さに帰属される可能性が強く、結果として学習意欲は高まらないと考えられる。従って、教師やコーチは、指導に際して課題の系統的指導や失敗が直接能力不足を意味しないような学習場面の雰囲気作りに配慮する必要があると思われる。このような意味においても教師要因が重要であると認知されているといえよう。

次に、陸上・球技・器械運動・水泳・格技・ダンスの6つの運動領域での優劣に対する原因帰属得点を表3に示した。また図2は、それらを図示したものである。

各運動領域の比較において、特筆すべきものをあげると、まず陸上運動では努力要因よりもむしろ能力要因が高い得点を示す傾向のあることがわかる。つまり、本人の努力よりも先天的で比較的变化しにくいと考えられる能力によって陸上運動の優劣が規定されると認知していることを示している。陸上運動は走・跳・投に代表されるように、基礎的な運動能力が必要とされる。またその成績は、記録によって能力の優劣が客観的に示される。このような陸上運動の特性によって、能力要因が重視さ

表3 運動領域別の帰属得点の平均値と標準偏差値

運動領域	帰属要因 性別	高 校					大 学				
		能力	努力	種目のむずかしさ	運 動	教 師	能力	努力	種目のむずかしさ	運 動	教 師
陸 上	男 子	4.0 1.23	3.9 1.17	3.2 1.00	2.7 1.03	3.4 1.09	4.2 0.91	4.1 0.96	2.8 0.93	2.3 0.85	3.6 1.01
	女 子	3.7 1.06	4.1 0.87	3.0 0.83	2.4 0.76	3.1 0.84	4.4 0.78	4.1 0.64	2.9 0.89	2.6 0.76	3.8 0.88
球 技	男 子	3.9 0.99	4.4 0.86	3.8 0.82	3.2 1.09	4.1 1.01	4.0 0.84	4.4 0.76	3.4 0.90	3.2 0.91	3.8 0.96
	女 子	3.3 0.87	4.1 0.83	3.4 0.78	2.6 0.95	3.4 0.78	3.9 0.79	4.5 0.61	3.4 0.80	2.9 0.91	4.0 0.82
器 械	男 子	4.0 1.21	4.1 1.01	4.2 0.85	2.6 1.15	3.8 1.01	4.2 0.93	4.3 0.83	3.9 1.03	2.3 0.90	4.1 0.98
	女 子	3.5 1.04	4.1 0.83	3.7 0.93	2.3 0.78	3.2 0.91	4.2 0.82	4.4 0.56	4.2 0.70	2.4 0.76	4.1 0.82
水 泳	男 子	3.4 1.21	4.1 1.06	3.3 1.03	2.4 0.95	3.6 1.05	3.7 1.04	4.4 0.74	3.0 0.93	2.2 0.83	3.7 0.98
	女 子	3.1 1.01	3.9 1.03	3.2 0.91	2.3 0.75	3.0 0.87	3.7 0.91	4.5 0.58	3.0 0.89	2.2 0.75	4.0 0.85
格 技	男 子	3.5 1.27	4.2 1.11	3.5 0.99	2.7 0.90	3.6 0.90	3.8 1.03	4.3 0.80	3.3 0.93	2.8 0.92	3.9 0.94
	女 子	3.2 0.96	3.8 1.15	3.4 0.98	2.4 0.89	3.0 0.86	3.7 0.84	4.3 0.61	3.5 0.76	2.7 0.90	4.0 0.67
ダ ン ス	男 子	3.1 1.30	3.6 1.32	3.2 1.18	1.8 0.97	3.2 1.40	3.7 1.25	3.8 1.02	3.2 1.03	1.9 0.91	3.8 0.97
	女 子	2.7 1.13	3.2 1.23	2.6 0.94	1.8 0.73	2.6 1.07	3.6 1.04	4.0 0.83	3.2 0.92	1.9 0.72	3.7 0.96

れたと考えられる。

次に器械運動では、他の運動領域と比較して、能力、努力、課題の困難度（種目のむずかしさ）要因がいずれも高い得点を示している。これは、器械運動が日常の運動とは異なる運動を要求される種目であり、技術の程度に応じて能力差が明確にされる傾向があるためではないかと思われる。

球技・水泳・格技およびダンスでは、努力要因が最も重視される傾向が認められた。つまり、陸上や器械運動よりも努力によって優劣が規定されると認知される傾向の強いことを示している。

一般に陸上や器械運動は、児童・生徒のきらいな種目として上げられることが多いが本研究結果は原因帰属の観点からそれら種目の特性を反映しているのではないかと思われる。これらの種目に対して自己の能力が低いと認知したり、種目自体が本人の能力以上に困難であると認知している者は、失敗経験を能力不足や課題のむずかし

さに帰属し結果的に意欲は高まらないであろう。そして、このような認知的プロセスを繰り返し経験することにより「きらい」になっていくと考えられる。陸上や器械運動においては、他の運動領域と比較して上記のプロセスに陥る可能性が高いために、その指導に十分留意する必要があると思われる。

2 自己評価および態度と原因帰属との関係について
自己評価および態度と原因帰属との関係をみるために、自己評価得点および態度得点を基準変数、運動やスポーツでの優劣に対する5つの帰属要因を説明変数とし重回帰分析を行った。男女および高校・大学別の重回帰係数と標準偏回帰係数を示したものが、表4、5である。

まず自己評価について、原因帰属が規定しているか否かを検討するために重回帰係数をみると、大学女子に1%水準で有意な係数が認められた($R=0.482$, $F(5,62)=3.76$)。また高校女子では有意な傾向が認められた(

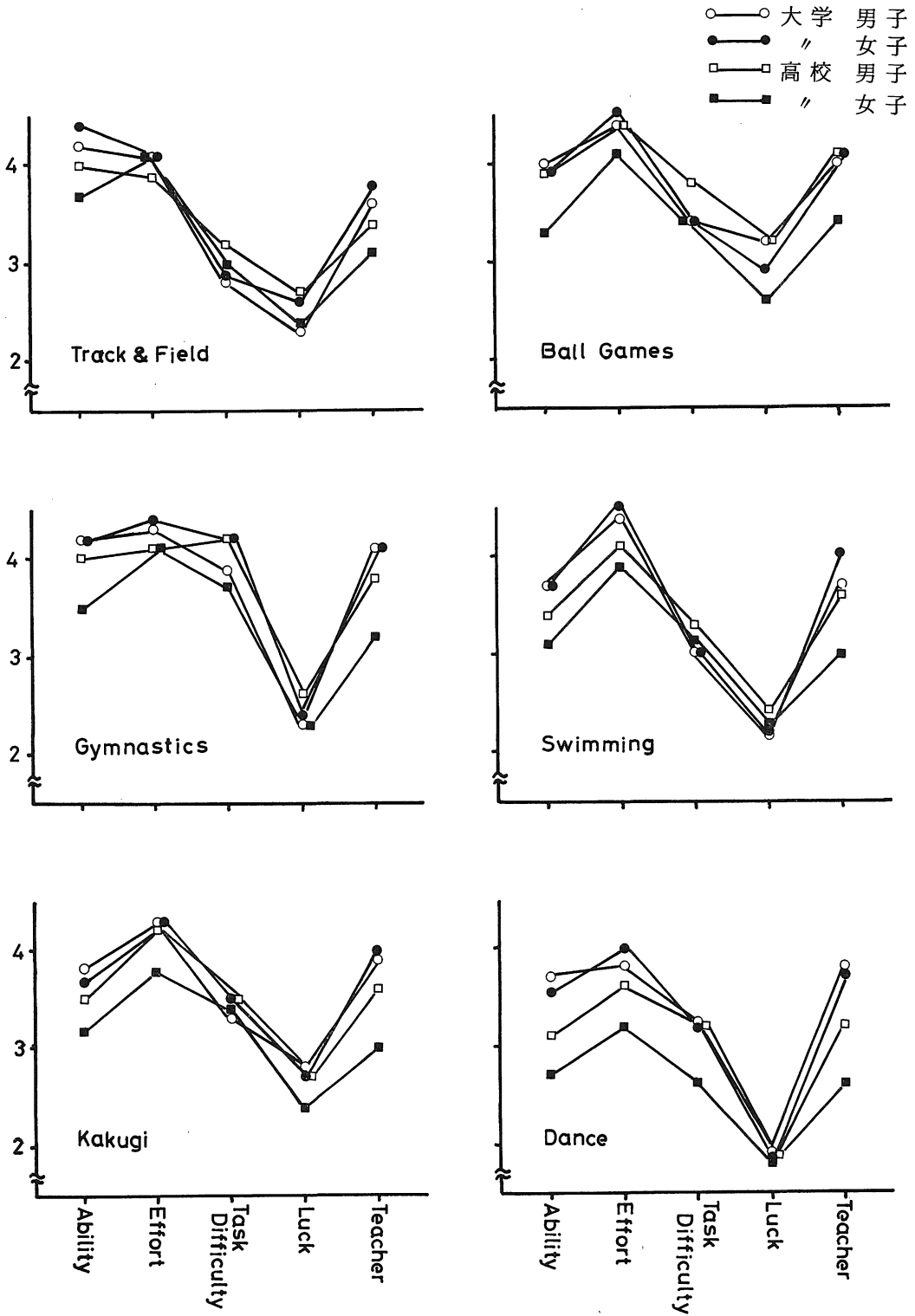


図2 運動領域別の平均帰属得点

表4 自己評価に対する帰属要因の標準偏回帰係数と重相関係数

帰属要因	高 校		大 学	
	男 子	女 子	男 子	女 子
能 力	-.264	-.326	-.092	.094
努 力	.390	.230	.172	.175
スポーツのむ ずかしさ	.218	-.062	.031	-.301
運	.009	-.347	-.112	.249
教 師	-.366	.188	.104	.193
重相関係数	.448	.414	.252	※※ .482

※※P<0.01

R=0.414, F(5,51)=2.11, P<.10)。一方男子においては、高校・大学ともに有意に至らなかった。

そこで、どの帰属要因が最も自己評価を規定しているかを検討するために、各帰属要因の標準偏回帰係数をみると、まず高校男子において努力要因に正の、教師要因には負の大きな係数が示されている。これは、運動やスポーツでの優劣が努力要因と関係が深いと認知するほど自己評価も高くなると予測され、教師要因と関係が深いと認知するほど自己評価は低いと予測されることを意味している。大学男子においても努力要因に最も高い正の係数が示されている。一方、高校女子では、運要因と能力要因にそれぞれ高い負の係数が認められた。これは、運動やスポーツでの優劣と運要因および能力要因との関係が深いと認知する者ほど、予測される自己評価が低いことを意味している。また、大学女子では課題の困難度要因に高い負の係数が認められた。これは、スポーツのむずかしさと関係が深いと認知するほど自己評価が低減されることを意味している。

以上の結果を男女別にまとめると、男子の場合、運動やスポーツでの優劣と努力要因との関係が深いと認知するほど自己評価は高いと予測される傾向があるのに対して、女子では、能力要因や外的要因である運要因、課題の困難度要因と関係が深いと認知するほど自己評価を低減させる傾向があるといえよう。男子において、努力要因が自己評価を高めるという結果は、男子が運動やスポーツを努力すれば上達できると認知する傾向があるためではないかと思われる。つまり、スポーツでの成績が努力によって規定されるという認知が自己評価を高める作用を有していると考えられるのである。一方女子の場合、能力要因や課題の困難度要因を運動やスポーツ場面

表5 態度に対する帰属要因の標準偏回帰係数と重相関係数

帰属要因	高 校		大 学	
	男 子	女 子	男 子	女 子
能 力	-.233	-.084	-.062	-.162
努 力	.443	-.046	.261	.041
スポーツのむ ずかしさ	-.242	.126	-.154	.015
運	-.307	.002	-.136	.150
教 師	-.465	.121	.186	.151
重相関係数	※※ .636	.192	※※ .369	.271

※P<0.05, ※※P<0.01

では自己の能力は低くスポーツ自体もむずかしすぎるといように否定的に認知する傾向があるのではないかと推測される。このような認知は、結果的に自己評価を低減させると考えられるからである。

自己評価は原因帰属と同様に学習意欲や動機づけを規定する要因と考えられるが、自己評価を規定する原因帰属要因が男女において異なるという結果は、体育やスポーツの指導に有益な手がかりを与えらると思われる。

次に、体育授業に対する態度と原因帰属との関係を検討することにする。まず重相関係数をみると、高校男子において5%水準(R=0.636, F(5,23)=3.13)、大学男子においては1%水準(R=0.369, F(5,105)=3.30)でそれぞれ有意であった。女子においては、高校・大学とも有意な重相関係数は認められなかった。

そこで、どの帰属要因が最も態度を規定しているかをみるために標準偏回帰係数をみると、高校男子では努力要因に正の、教師要因には負の大きな係数が認められた。これは、運動やスポーツでの優劣と努力要因との関係が深いと認知するほど体育授業に対する好意的態度も高く、教師要因と関係が深いと認知するほど好意的態度は低いと予測されることを意味している。大学男子においても努力要因に高い正の係数が認められ、努力要因と関係が深いと認知する者ほど好意的態度が高いと予測されることを示している。

一方女子の場合、高校・大学ともにいずれの係数も低い値を示しているため明確ではないが、高校では課題の困難度要因が、大学では能力要因が最も大きい値を示している。これは、運動やスポーツでの優劣と課題の困難度要因との関係が深いと認知するほど、また能力要因と関係が深いと認知するほど好意的態度を低減させる傾向

があることを示している。

以上をまとめると、自己評価と同様に、男子では努力要因が好意的態度を高める傾向にあるのに対し、女子では能力要因と課題の困難度要因が好意的態度を低減させる傾向があるといえよう。つまり、男子の場合、努力要因を成績を規定する肯定的要因と認知し、女子では、努力の必要性は認めるものの成績には反映されず能力や課題の困難度要因を否定的要因と認知するという差異が、態度を規定する帰属要因における差異をもたらしたと考えられるのである。

以上、原因帰属が自己評価と態度とを規定しているかについてはいずれの重相関係数も低く十分支持されているとはいえない。しかしながら、男女において重要な規定要因が異なり、帰属要因の内包的意味の捉え方に性差のあることが示唆された。学業成績の原因帰属を検討した速水と長谷川³⁾は、男女において帰属要因間の関係が異なって認知されていることを指摘しているが、本研究における性差がスポーツ場面において特異なものか、また発達段階を通して認められるのか今後検討を必要とされるであろう。また、原因帰属を測定する場合、その測定方法に十分注意する必要があると思われる。

IV 要 約

本研究の目的は、スポーツに対する原因帰属の様相と自己評価および体育授業に対する態度と原因帰属と関係を明らかにすることであった。

主な結果は以下の通りである。

1 運動やスポーツでの優劣は、主として努力、能力、教師要因に規定されると認知する傾向が認められた。また、各運動領域別にみると、陸上運動では能力要因が、器械運動では能力および課題の困難度要因がそれぞれ重要であると認知される傾向が認められた。さらにこれらの傾向は、男女・高校・大学を通して一定したものであった。

2 自己評価および態度と原因帰属との関係において、その関係は十分なものとはいえないが、男子においては努力要因が自己評価と態度を高める方向に作用しているのに対して、女子の場合、能力要因と課題の困難度要因が自己評価と態度を低減させる方向に規定する傾向が認められ、帰属要因の内包的意味の捉え方に性差の存在することが示唆された。

引用文献

- 1) Gill, D. L. and Martens, R., "The role of task type and success-failure in group competition," *International Journal of Sport Psychology*, 8-3 : 160-177, 1977.
- 2) 波多野諄余夫(編), 自己学習能力を育てる, 学校の新しい役割, 東京大学出版会, 1980.
- 3) 速水敏彦・長谷川孝「学業成績の因果帰着」*教育心理学研究*, 27-3 : 197-205, 1979.
- 4) Iso-Ahola, S., "Effects of team outcome on children's self-perception : little league baseball," *Scandinavian Journal of Psychology*, 18 : 38-42, 1977.
- 5) Iso-Ahola, S., "Perceiving the causes of objective and subjective outcome following motor performance," *Research Quarterly*, 49-1 : 62-70, 1978.
- 6) 伊藤豊彦「運動パフォーマンスにおける成功・失敗の原因帰属に関する研究」*体育学研究*, 25-2 : 105-111, 1980.
- 7) Jones, E. E., Kanouse, D. E., Kelley, H. H., Nisbett, R. E., Valins, S., and Weiner, B., *Attribution : perceiving the causes of behavior*, General Learning Press, 1972.
- 8) 小林篤 白銀茂夫 向井肇晴 土井池晃「態度測定による体育の授業診断の手引き」*体育科教育*, 22-4 : 32-40, 1974.
- 9) Scanlan, T. K. and Passer, M. W., "Self-serving biases in the competitive sport setting : an attributional dilemma," *Journal of Sport Psychology*, 2 : 124-136, 1980.
- 10) Weiner, B., *Theories of motivation*, Rand McNally, 1972. pp 355-418.